せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇三号（一日発行）
平成十年四月一日

年表で読む 古平の歴史 《10》

■蝦夷地に幕府がのりだす

古平の場所請負人であった岡田家が、港町に恵比須神社（現在の厳島神社）を創建したのが宝歴元年（一七五一）ですが、そのころから松前藩は、ロシヤ人が千島列島を伝わって来て、道東のアイヌの人たちと交易していることを知りました。

幕府も蝦夷地の警備や交易で利益のあることから、その方面を幕府が直接治めることにし、その後、文化四年（一八〇七）には蝦夷地全島を幕府が治めるようになりました。

■遠山金四郎景晋らの一行が西蝦夷地を調査

国内でも蝦夷地のことが大きな問題になってきたことから、文化三年（一八〇六）に幕府は西蝦夷地の調査をしましたが、この時来たのがテレビでおなじみの「遠山の金さん」の子で目付役・遠山金四郎景晋でした。

三月で、船旅も難儀だということで松前から徒歩で巡見をしましたが、積丹半島は船で通過したようです。

「ビクニ　運上屋、そのほか漁小屋、アイヌ小屋多数あり、この辺り山に雑木が多く、海中にチャシナイという小島がある。この島があるので波がよけられるが、運上屋の前浜は何もなく船がかかるには適していないようである。そこから岩山の外を回って、

アトマイ　にしん漁の小屋少しあり、

ヘロカルウシを過ぎると、海は東に入り込んでいる。

フルヒラ　運上屋、そのほかにしん小屋、アイヌ小屋が多い、船中から見たところでは、よい漁場のようである。ラルマキ（沖町）、イウナイ（豊浜町）シュマトマリ（潮見町）、レタルヒラ（白岩町）

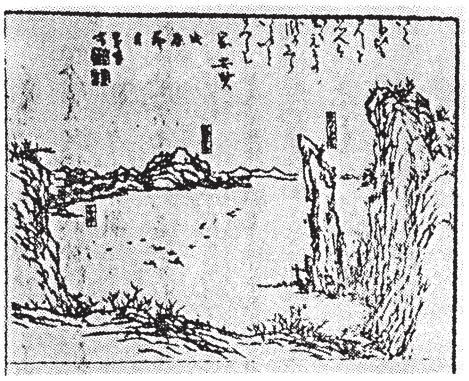
この日（四月十七日）は昼ころになって雨が晴れたので、シコタン（積丹町日司）を出帆して下ヨイチに泊っている。

■再度古平を巡見した松浦武四郎の日誌

このころの古平のことを最も詳しく多く書いているのは、北海道の名付け親でもある松浦武四郎です。これより前の弘化三年（一八四六）と安政三年（一八五六）二度来ていますが、そのことを安政四年（一八五七）に出版した『西蝦夷日誌』に次のように書いています。

「西部の繁盛はいまさら言うまでもないがここに記しておく。シャコタン、ビクニ、フルビラ、ヨイチ、ヲショロ、タカシマ、ヲタルナイの七か所は、この地第一の場所で、年ごとに町が開け永住や財産をを移す者が増え、また産物も多い。崖を崩したり磯を埋めたりして家が建ち並び、弘化三年に来た時から十一年経った安政三年には、辺りの様子がすっかり変わってしまっていた。

この年から神威岬を女人の越えるのを許したので、これより奥地の方も一層盛んになった。神社、仏閣、宿屋、酒屋、もち屋、食べ物屋、料理屋などが並んでいて、この賑いからは昔のことはとても考えられない。」



大正十一年

――続き――

7／19　校長から小学校も間もなく増築が完了するので、同窓生でなにか記念品とのことで協議、石かれんがの校門ということにして、金が余ったら電話を架設するということになった

7／21　電気会社では宣伝のために、屋根から家の周りに電灯を七十から八十灯もつけたので、大勢集まって来て見ている

7／22　関口郵便局長が亡くなった

8／12　学友会主催の弁論大会が古盛座である、野呂が一番よかった

8／16　二条部落会長石河氏主催で、浜町郵便局拡張問題について、浜町部落会役員が全員信用組合事務所に集まって一時から協議したが、満場一致で賛成、運動方針は会長に一任

8／17　古平鉄道敷設問題について昨年期成会設立、山口会長、高野主人が中西代議士を通じて依頼、山口、原田、米田の三氏が近く上京して、中西代議士の紹介で当局に陳情することになった

8／18　夜、郵便局問題について協議する、山口会長等三人が上京した

8／19　午後学校で、校門の寄付の件で協議、五百円は集金できる見通し

8／24　泊村の青年団員十余名が来て、学校前で記念撮影をしている、十時から信用組合で郵便局問題について協議し、浜町部落会役員の署名と印をもらいに歩くことになった、鉄道問題で来る二十八日東京から技師が来る旨入電あり

8／27　十時から木材会社の総会、正午から信用組合の役員会、一割程の配当がある、明日、鉄道院の技師が来るというので町長、㊟主人、ほか四、五人が余市まで出迎えに行く

8／29　前日は晴れていたのに、今暁二時ころからの豪雨で大水が出ている、土場方面では家財道具を運んでいる、港町竹内さんの裏山が土砂崩れで家が破壊、人には被害なし、夜の八時ころになってようやく雨が止む

8／30　鉄道院技師等が今日帰る、町長、㊟主人が余市まで見送りする

9／14　小樽へ入港していた第一艦隊四十隻余りが古平沖を通る、浜では大騒ぎ、飛行機も飛ぶ

9／13　町長、㊟主人が明日道庁へ出かけ、学校落成式、鉄道問題について、長官に古平へ出張されるよう請願に行くとのこと

9／20　恵比須神社祭、今年は余興もなく寂しい祭りであった

10／14　大謀で大マグロが沢山とれたが、コレラのため東京などの各地へ輸送できず大暴落、十貫目十四円～五円、一時半、富丸で宮尾長官夫人が来る、愛国婦人会会員が浜へ出迎えに行く、吉井旅館へ泊る

10／15　古平小学校増築落成祝賀会、紅白のモチを貰って子供達が帰って来た、愛国婦人会、処女会の総会がある、長官夫人が出席、夫人は午後二時頃発動機船で帰られる、六時から生徒のちょうちん行列がある

10／18　三千トン級の汽船が入港してブリの積み出しをしている、十六日にブリ大漁、千尾余りとった

10／20　品評会（十五日）の賞状授与があった、平田、田岸、石井が優等賞、余市から参考出品のリンゴの試食会をする

10／22　観楓会、水産組合に集まりスリバチ山に登るが雨で下山、㋑別荘を見る、立派

高野名幸作さんの日記から

学校の建設に明け暮れる

【3】

なものである、アユふ化場を見て帰る

10／25　電気会社で、戸外に五百燭の大電球をつけたがずいぶん明るい、子供達が騒いで喜んでいる

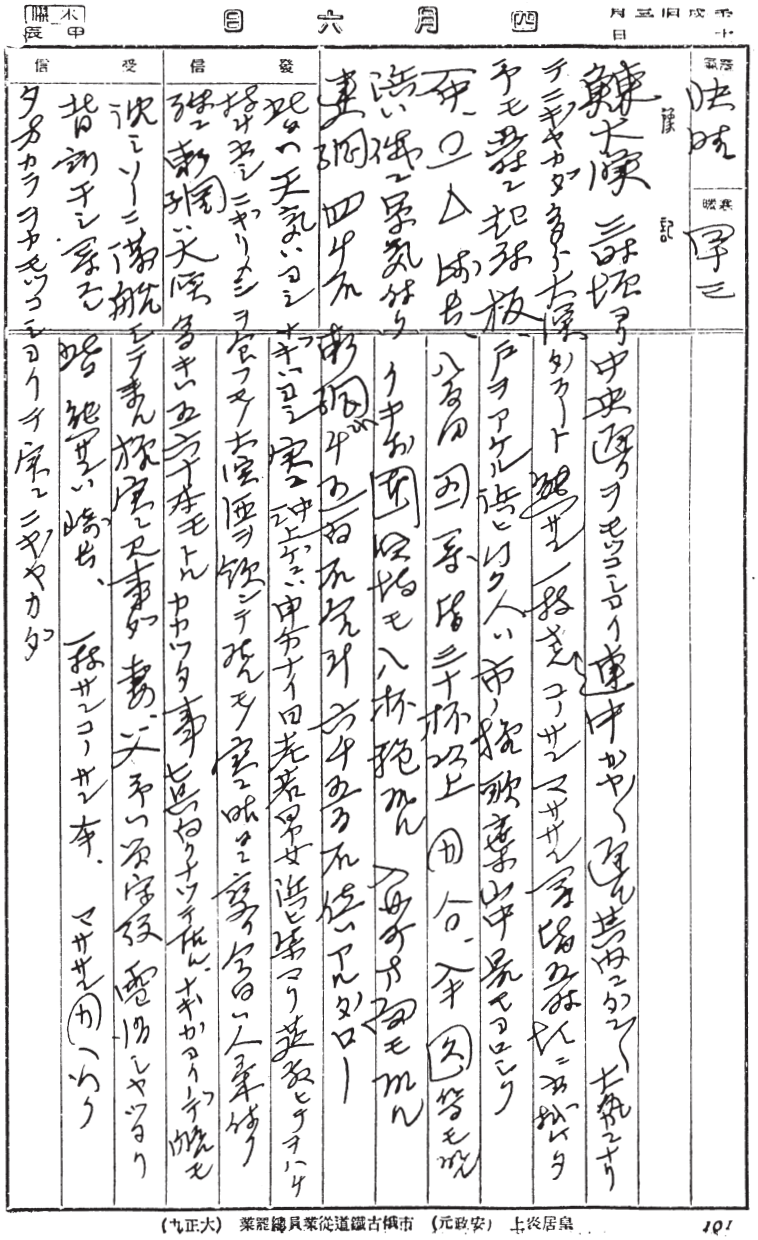
11／18　サメ大漁、六百尾とれた、一尾三十銭、百八十円になる

11／30　学校の裏へ、禅源寺裏の池から木管で水を引いている

12／1　古盛座で火防衛生活動写真がある、十一時帰る

12／4　小学校で社会改善講演会、道庁から来て禁煙宣伝である、十時半帰る

× × ×



四月六日　快晴　四十三度

鰊大漁、三時頃ヨリ中央通リヲモッコショイ連中ガヤガヤ通ル、其内ニダンダン大勢ニナリテニギヤカダ、多分大漁ダロート熊サン、一枝サン、コノサン、マササン等皆五時頃ニ出掛ケタ、予モ五時ニ起床板戸ヲ開ケル、浜ヒ行ク人ハ市ノ様、歌棄山中最モヨロシク、△中、〇一、△、崎長、八反田、メ等皆三十杯以上、㋕、△キ、㋓等モ取ル、浜ハ俄ニ景気付ク、クキ村㋓漁場モ八杯程取ル、入舟町方面モ取ル、建網四千石、刺網弐千五百石、合計六千五百石位イアルダロー、

此日ハ天気ハヨシ、ナギハヨシ、実ニ沖上ゲニハ申分ナイ日、老若男女浜ヒ集マリ莚敷ヒテヲハチ持チ出シ、ニギリメシヲ食ウモノ、大漁酒ヲ飲ンデ居ルモノ、実ニ昨日ニ変リ今日ハ人気付ク、

殊ニ刺網ハ大漁、多キハ五、六十本モトル、カカッタ事真白クナッテ居ル、ナギガヨイノデ船モ沈ミソーニ満船シテ来ル様実ニ見事ダ、妻、父、予ハ留守役、雪消シヤッタリ背割リ干シ等スル、此日、熊サンハ崎長、一枝サン、コノサン㋓、マササン㋕へ行ク、夕方カラオカモッコショイデ実ニニギヤカダ

× × ×

読みやすいように読点（、）や傍点をつけました。

莚敷ヒテ＝むしろ敷いて

珍味ガンジのはなし

竹内コト

昔はにしん場が終わると、沢江の漁師さんたちはカレイの刺網に切り替えますが、その間にガンジの刺網をします。

「ガンジ」を獲るのは大変短い期間ですが、大量に獲れないことから非常に値段がよく、仲買いの人たちは船の帰るのを待って浜で買い付けていました。

そのときのことで、私が今でもはっきりと覚えていることがあります。

ある日のことでした。父の船が帰って来ると、早速、いつも買ってくれている仲買さんが来て取り引きが始まりました。すると、遅れて来た一人の仲買さんが父のそばに来て、それを売ってくれというのです。これには父も困ったようでした。どちらも大事なお客さんですし、どうしたらよいものかと思案していたようです。そのうちに、仲買人同士がガンジの取り合いを始めたのです。仕方なく父も仲に入って、どうやら言い争いはおさまったようでしたが、口論してまで欲しかったガンジは、「ソボロ」の原料として重宝されていたのです。当時、ソボロというのは高級な食料品ということもありましたので、儲けも多かったからなのでしょうか。近ごろはあまりガンジ網のことは聞きませんが、今でも市場ではせりにかけられることもあるそうです。ガンジは見た目にはかっこう悪い魚ですが、干物にしてもビックリするほどの珍味です。

母のアカギレと洗濯の知恵

滝沢辺ハツエ

もの心ついたころから今日まで、郷土の移り変りを見て育ち歩んできました。目まぐるしいまでの文化の発展には、ただただ驚くばかりでした。

顧みますと、祖先の歩んで来た道と現代とは雲泥の差があります。先人は生きることに精一杯の時代に、黙々と労働にも精魂こめて耐えた人生でした。私は往時をしのび、亡き両親を思い出しております。

今は洗濯ひとつにしても、洗濯機があり、洗剤から漂白剤、柔軟仕上げ剤までも豊富にあって、主婦に代わって洗濯機が洗ってくれます。子どものころ、母が使っていたのは灰水（あくみず）でした。当時は薪を燃料にしていましたから、灰はいくらでもありました。一斗樽に灰と水を入れ日向に出して置いて、上ずみをくんでその中に洗濯物を浸しておいて手洗いし、すすいでからのり付けをします。

自家製ののりは、夏の季節になっていたみかけたご飯をさらしの袋に入れ、これもまた水を入れた樽の中でさらして作るのです。たらいに入れた衣類に丹念にのり付けをしてから、余分なのりを絞って乾かします。こうすることによって、シャキッとした仕上がりになります。

当時の洗剤として、灰水とのりは優れた洗剤でした。母は、発動機船の燃料（重油）で汚れた作業服の洗濯には大変苦労したようです。手は荒れて、冬になるとあかぎれになり、傷口に木綿糸を巻いていたのを思い出します。これが治療法でした。私も大正生まれ、自分で洗濯するようになって母の苦労がよくわかりました。

平成になって早や十年、この先世の平和と公害の無いことを願って、余生を送りたいものと思っております。

遥かなる故郷の思い出

『古平弁』の話 ②

[43]

橘 義春

『ハンカクサイ』という古平弁があるが、これもおもしろい方言である。これは知的障害者という意味ではなく、何かやることが少しぬけている人ということで、「このハンカクセェ者」というが、津軽に古くからあるウダッコ（歌）に、

『親父ァ馬鹿ケで
カガ（嬶＝かかあ）ハンカケ
なんてこのアンコ（若者）
ハンカクセェ』

とあり、これは津軽弁だがいつの間にやら古平に定着して、古平弁になったのでねェべが。

男兄弟で、たった一人より残っていない弟の顔を見るのにたまに帰省した時など、夕方、知り合いに「お晩です」とあいさつされると、これで、やっとふるさと・古平へ帰ったというう れしい気持ちになる。なかには「今晩は」、と言う人が何人かいたが、「お晩です」という方言には、なんともいわれない温かみがあり、「今晩は」というよりよっぽどいい言葉だと思っているのだが……。昔から北海道、東北、樺太（サハリン）も「お晩です」と言っていた。

こんな味わいのある言葉が、古平から消えていくとしたらちょっと悲しいことでねェべが。「お晩です」が一番だってば、私はそう思っている。

『ゴッペカエシタ』（失敗した）もおもしろい方言である。小学校を出るとすぐ東京で就職したが、古平弁でいう「ゴッペカエシタ」ことがある。

住み込みで働いていたので、部屋には三人の先輩がいたが、そこへせんべいの差し入れがあった。

私は、せんべいといえば南部せんべいと瓦せんべいしか知らなかったが、古平の干し餅に正油をつけて焼いたようなものが東京のせんべいであった。今なら古平にもあるが、そのころの古平では見ることもなかった。四人いるところにせんべいが五枚だったので、半端の一枚はジャンケンで勝った者が貰うことになった。私ははじめて食べた東京のせんべいがうまかったので、なんとかしてそれも欲しかった。

私は張り切って大きな声で、「キッキノキッ」

すると先輩たちは、

「いま、なんて言った？」

と、聞くので、

「キッキノキッ」

と言うと、「それ、なに語だ」

「日本語だべサ、ナーンモオガスグネベサ」

とやったものだから、三人の先輩たちは腹をかかえて畳の上を転げ回った。

それから暫くの間は「キッキノキッ」で、からかわれるはめになってしまった。

〈つづく〉

川柳

北政道

平成の年号が泣く金の乱
大蔵と銀行神話総崩れ
大型の倒産もあり春嵐

渡辺ハツエ

ナツメロを床で聞いてる独り部屋
浜不漁カラスの縄張りゴメ荒らす
なにもかも齢には勝てぬ枯れすすき

古平の方言 (14)

・まがなう＝支度する、始末をつける
・まぐらう＝（乱暴な言い方で）食べる
「あいつおおまぐらい（大食漢）だナ」
・ましゃぐにあわね＝採算がとれない、（こっちが）損をする、ましゃく（間尺）はものを作るときの寸法
「経費ばっかりかがってましゃぐに合ねぇ」
・までだ＝ていねいだ、（本州のある地域では、けちだという意味にもつかわれる）
・まなご＝目、（青森の人はまなぐ）
・まなくたま＝目の玉
・まねあげる＝（事故を起こした）船が陸に合図をする、火で合図する、誰かに助けを求める合図をする
・まねこぎ＝何でも人まねをする、
「あれ エぇ まねこぎだ」
・まま、まんま＝ご飯、食事のこともいう
・まめし、まめしい＝骨惜しみしない
まじめだ、勤勉
・まやね＝だめなこと
・まるっきり＝全く、ぜんぜん
・まるける＝束にする、荷造りする
・まるこい、まんまるこい＝丸い、
・まるこぐなる＝丸くなる
「・・・背中 まるこぐなったなァ」
・まるって＝とっても、大変
「今年は まるって雪も少ねがった」
・まるめる＝丸くする、（だんご）を
まるめる、（荷物など）取りまとめる、（相手を）いいくるめる
・みぐせぇ、みぐさい＝みなりがだらしない、みっともない、かっこうわるい
・みずくさい、みずくせぇ＝水っぽい
「このおつゆ ずんぶ みずくせぇな」
・みずこぼし＝茶がらなどを投げ捨てる小さい器
・みっぱ、（みば）＝外観、ていさい、見かけ
「みば いいども なんもうまぐねェ」
・みみきかず、みみきかんず＝耳のとおい人、きかんずともいう
・みみのり＝ギンナン草、ホドゲノミミ（仏の耳）ともいう、（春に磯で採取する）
・むかっつら、むかつら＝顔を悪くいう、気に食わない相手のことをいう
「あいつの むかっつら 見たら気分悪い！」

文芸

古平短歌教室詠草

長崎フユ

鉈（なた）をさがして玄関前の氷割りぬ
新聞少年の口笛あすも聞こえるか

池田テル

雪玉を作りつつゐて思ひ浮かぶ
幼き日の雪合戦たのしかりにき

鈴木時子

授業参観日に孫の伊緒里は音読を
終へてにっこりわれに振り向く

竹内コト

札幌の孫の賀状の片隅に
受験は頑張りますと書きあり

榊佳代

冬を越え春に向ふを歓こびて
雛のまつりに馳走いただく

陽の射せばスズメの声の甲高し
雪のとけたる窓の近くに
田中香苗

雪解けの水の凍れる夕べ路
長野にてはパラリンピックが始まる
堀典子

配膳の桜餅と寿司とお吸物
雛まつり今日の病室賑はふ
菅原節子

春日和つづき峠の雪解けて
たち上る熊笹風に吹かるる
東美知

高だかとテトラポッドにぶつかりし
波のしぶきに小さき虹たつ
堀昭子

講演を聞きつつ見ゐる窓ガラス
枠にあたかも画を見るごとし
丹後初江

小さき音にも怯え飛び立つ雀らよ
群れをなし来てわが餌啄め
山口スヱ

俳句

古平ホトトギス会

制服を脱ぎ彼岸会の僧となり
斉藤波留

しもやけの手をつつんでくれし母のこと
仲谷比呂子

海凍り風の凍れる岬かな
越野清治

鱈漁に一喜一憂する暮らし
大和田絵伊

盆の月仰ぎて逝きし夫偲ぶ
仲谷美砂

足病みて秋の彼岸も出歩けじ
大島喜恵

盆梅の香りにすゝむ朝餉かな
山口悦子

うららかや試歩も千歩を目標に
岩瀬みのる

越野敏雄

木達磨の転げおちたる春の雷

越野スミ子

大試験うかりし電話はずみくる

福井幸平

大寒や水道の栓たしかめて

水見句丈

積丹の磯凪日誌九月盡

山口浪

文化の日ソーラン節を友と吾れ

長谷川和子

すけそ漁三千函もめずらしく

木村芳園

四月早や花苗を売る店先に

仲谷安代

足元を走る雪解の小川かな

入院生活を終えて

福井幸平

春の暇借りて人間ドック入り

検診のあれこれ続き春寒し

二か月の検診検査ながびけり

カメラ含む検診春のながびけり

輩のポリプ切らるる春吹雪

配膳車マスクのナウス御飯よと

大部屋の患者静かに春昼寝

眠られぬ短き夜もありにけり

春昼寝患者の足の向き合えり

病院のおもてに今日も焼芋屋

入院の患者目当ての焼芋屋

焼芋屋別誂のリヤカーよ